【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	山　口　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	山口市立大内南小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	4	4	4	4	4	1	２４	３５
児童数	115	147	138	154	133	146	1	833	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら学び、心豊かに生きる子どもの育成
～学力の基礎・基本の確かな定着を土台として～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・１年　算数・国語
　きめ細かな指導で、基礎・基本や自ら考える力を身に付けるため。
・２年　算数
　基礎・基本の一層の定着を図り、個人差を最小限に抑えるため。
・３年　算数
　学力格差の出やすい学年であることから、一層のきめ細かな指導並びに個に応じた指導を行うため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 児童の学力実態を把握し、学校全体の学力の向上を図る。 ○　研究の見通し（仮説） 反復練習・個別指導・習熟度別指導・教材の開発により、全体の到達度８０％を達成する。 ○　研究の内容・方法 上記指導の後、各学期ごとに到達度テストを実施し、中間総括と指導の見直しを図り、より一層きめ細かな指導を行う体制をつくる。

平成16年度	○　テーマ 学力実態に応じた指導体制の見直しを授業改善・学習規律の見直しの観点から行う。 ○　研究の見通し 授業研究を通して、指導内容を見直し、授業における児童の学習能力の向上を図る。 ○　研究の内容・方法 到達度テストを年間３回実施する。授業研究の中で定性的、定量的な分析をし、児童の学力実態と学習能力の到達度の向上を図る。

(3)　研究推進体制

校　長 ― 教　頭 ― 校内研究推進委員 ― 低学年部会
中学年部会
高学年部会

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

児童の学力実態把握の取組

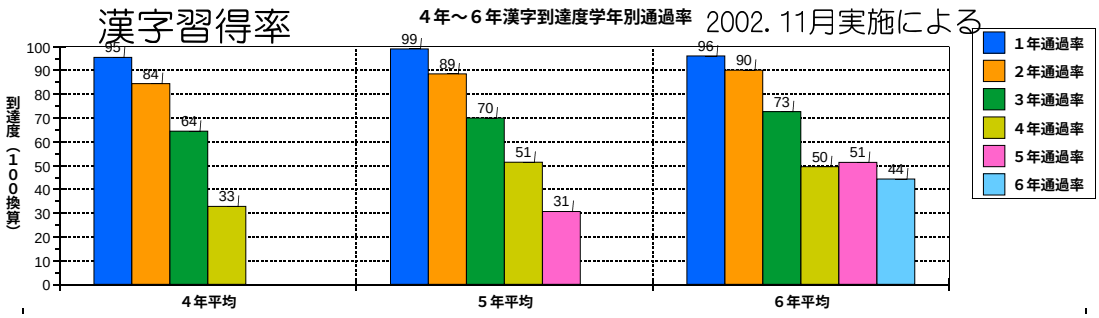
(1)　「漢字習得率」と「計算力」の実態把握

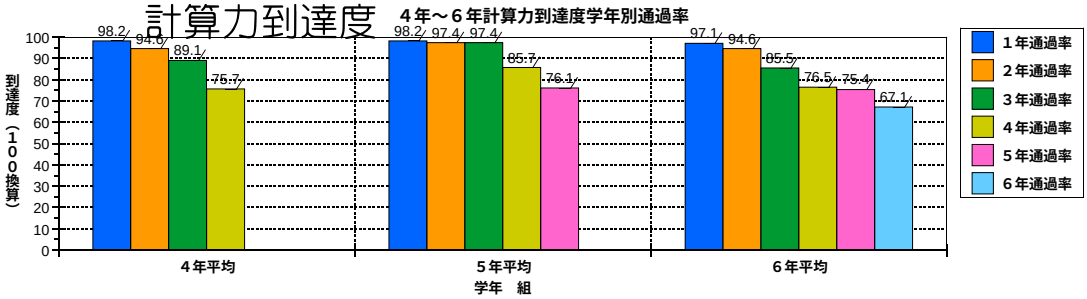
①　基礎・基本の徹底を図り、その実態把握に努めるために平成１４年度に「漢字習得率」と「計算力」のテストを全校一斉に実施した。実施方法として前学年のものだけでなく、経過学年のすべてをさかのぼって実態を把握するようにした。

６年生ならば、１年・２年・３年・４年・５年・６年と学年別に問題を提示し、一人ひとりの児童のつまずきが始まった学年や問題の傾向を明らかにしてきた。

実施にあたり「漢字習得率」テストは各学年から２０問、「計算力」テストは１０問を抽出して採点・集計したものが以下のグラフである。

特に学力差の大きくなる４年～６年の「漢字習得率」と「計算力」の到達度を学年別に示したものである。





②　平成１４年度第１回到達度テストを終えて（実施日時：平成１４年１１月）

計算力については、全学年共７５～９０％の達成度がみられ、スキルタイムの有効性も確認することができた。しかしながら、漢字については、１年生を除き目標達成にはほど遠い現状であった。とりわけ３～４年生段階からの落ち込みが大きく、これまでの指導の見直しの必要を迫るものであった。

到達度テスト実施段階で指導したばかりの当該学年の達成度が最も低いことを鑑みて、単元ごとの指導の繰り返しには限界があると判断された。反復指導だけでなく、つまずきの見られた学年にまでさかのぼって行う「さかのぼり反復」指導の取組の契機となった。

また、データの分析は、通過率・達成度・平均点だけでなく、学級内の得点の「度数分布」を明らかにすることから、指導方法の見直しと改善にも役立てたいと考えた。

以上の実態から、これまで実施してきた朝の１５分間の「スキルタイム」のあり方を見直し、より有効に活用するために以下のように時間設定の変更を行った。

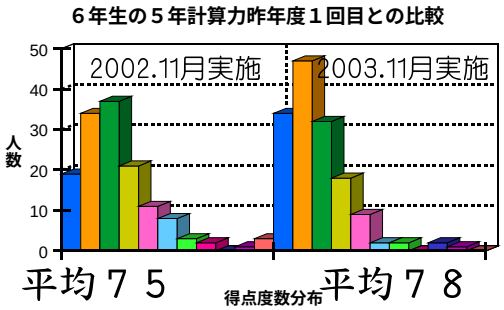
・　国語、算数の授業の最初の５～１０分間を基礎・基本の指導にあてる。
・　時間設定の変更後、平成１５年２月に平成１４年度第２回到達度テストを実施する。
・　漢字の到達目標を１回目の結果から７０～８０％とする。

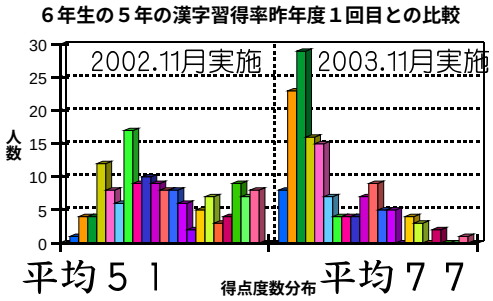
（２）平成１５年度第２回到達度テストを終えて

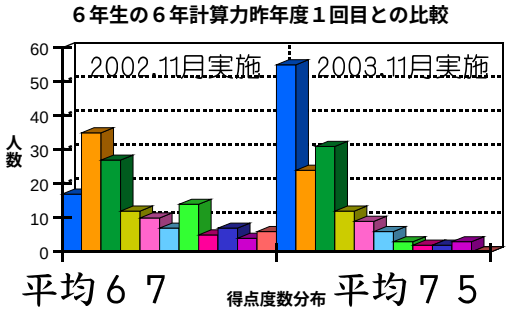
①　平成１５年度の到達度テストは第１回目を１学期６月に、第２回目を５ヶ月後の２学期１１月に実施した。平成１４年度同様「漢字習得率」と「計算力」

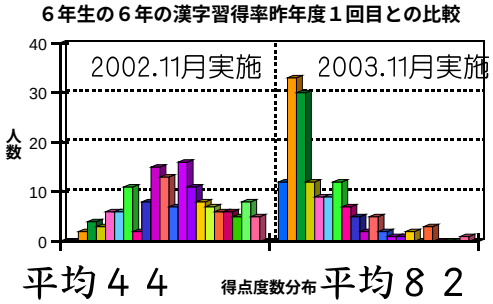
のテストを実施した。
　昨年度から通算４回のテストを実施してきたが、この間にスキルタイムの見直し、時間設定の変更、授業研究と学習規律の改善等にも取り組んできた。平成１５年度は教職員の共通理解に加え、保護者にも学力向上フロンティア事業実施の様子を学級・学年だよりで知らせている。また、出題する問題の形式や方法についても見直しを行った。
　平成１４年度１回目から平成１５年度１回目までの３回のテストで「計算力」については、各学年共８０％をほぼ達成しているし、「漢字」については、３年の範囲のテスト結果から次第にＪ曲線が崩れてきていることが把握できた。
　到達度テストで得た結果を単に実態把握に止めずに、児童の学習意欲の喚起や学習能力の向上に生かしていくように、あらゆる機会を捉えて基礎・基本の定着を図る指導に結びつけていきたい。このことは本校が学力向上フロンティア事業でめざす確かな学力の育成そのものである。

②　大きく変化した度数分布・・・到達度曲線へのチャレンジ
平成１４年度と平成１５年度の度数分布の比較（６年生対象１１月実施）
※左側平成14年度:右側平成15年度を表す









　グラフでも明らかなように、本校の各学年集団の変化を１回目から定量的並びに定性的にみることにより、よりきめ細かな指導方法の工夫と改善に取り組むことができるようになっている。また、学級の様子は「学級だより」等で保護者にも伝え、家庭と連携した取組も始まろうとしている。
　個人懇談会でこの結果を活用すると、保護者から「具体的でわかりやすい」「〇年生からつまずきが見られるようになった」などが聞かれた。「計算力」と「漢字習得率」の向上が学校と家庭の共通の課題となり、実りある話し合いがなされるようになった。

２．今後の課題

（１）スキル徹底の落とし穴・・・基礎・基本は何のため
　なぜ取り組むのかを児童へしっかり説明すること・・・スキルばかりではつまらない。
　授業の充実があってこそ、スキルへの意欲が一層高まる。
　子ども自身が成長や伸びを実感した時、もっと学びたい、もっと知りたいという意欲がでてくる。今後はその期待に応える教材の準備と開発を行う必要がある。

・　日々の授業時間の中に、基礎・基本を身に付けさせるスキルの時間をバランスよく取り入れる。１単位時間の中の２割の時間をスキルにあてると

ともに、残り８割の通常の授業時間を充実させる。
・　日々の授業を一歩高い次元に向かわせるために、適切な視覚教材の選定や発問の吟味等、授業の準備を十分にする。

（２）学力の基礎・基本を伸ばす手だて
計算力を高めるために「百マス計算」を継続的に取り組んできたり、不得手の箇所を重点的に取り組んだりした結果、何をどのように伸ばしていけばよいのかも明らかにすることができた。
今後、個別カルテや度数分布表をもとに、さらに実態に応じた指導をする見通しももつことができた。

（３）総括評価のあり方について
単元の総括評価、学期末の総括評価、学年末の総括評価等、具体的に提案しながら取り組んできたが、授業に生かす評価にするにはまだまだ課題は少なくない。１時間の中で一人ひとりの個別の評価をどのようにみていくか困難な面が多々見られた。「評価」のために授業が止まってしまっては、本末転倒である。本来は、授業の中で生き生きと活動する子どもたちの生の姿を的確に評価する形をとりたいと思う。
そのために「自己評価」「作品評価」「ノート」や「感想」等を生かす形を一層模索していきたいと思う。

（４）到達目標の明確化
上記の単元の総括評価において「評価規準」を一層明確にすることが求められる。すべての学習内容に「評価規準」を設けていくと、その総括に多大な時間と作業を必要とすることになる。
各学年の中で「必須項目として身につけるべき内容」と「より望ましい方向に少しでも向上させるべき内容」を見極め区別しておくことが必要である。

（５）授業改善への取組
各学年で身に付けることの共通理解を図ることが、これから一層求められる。〇年では、何を、〇年までにはどこまでを・・・常に情報交換と相互理解が欠かせない。現在、本校で授業研究や子どもたちの「学習規律」の到達度をはかるものとして、以下のステップを共通認識としている。

ステップ１・・・立ち歩きや私語なく授業が進められる。
ステップ２・・・教師の発問に全員が反応し、素直に指示に従い、授業が受けられる。
ステップ３・・・教師の発問に一人ひとりが答えを用意し、友達の意見に反応しながら授業が受けられる。
ステップ４・・・その場その場の学習課題を理解し、教師の発問や友達の意見と響き合った発言ができる。また、自分の活躍について自己評価ができる。
ステップ５・・・学習課題をもって授業に参加し、教師・友達とともに授業をつくることができる。自分の意見、友達の意見を大切に、課題を深めることができる。

本年度の取組によって、現在ステップ３～４の段階に達しているものと思われるが、課題の探求、問題解決型学習、「総合的な学習の時間」への一層の関わりを求めるならば、全ての学級のステップ４の段階への引き上げが急務である。
各学年並びに各学級のステップを明らかにしながら、より高いステップをめざしていきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

「漢字習得率」「計算力」テストの実施
・　６月・１１月・２月に実施し、前回との比較、学級集団の度数分布、学年集団の度数分布を明らかにする。
・　児童一人ひとりの習得状況、到達度の伸び、課題を明らかにし、個別指導の重点化を図る。
・保護者への啓発
実施前に取組への構えの周知を図るとともに、実施後は学年・学級だより等を通じて、学習の様子を伝え、家庭や地域との連携を緊密にする。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

本年度の研究の成果は、「取組のまとめ」として冊子を作成し普及に努めたい。
本校の学校全体での実践は、２００２年山口市教育研究大会で報告を行い、具体的な実践事例、到達度並びに変化の様子を伝えてきたところである。
本年度も、教務主任並びに研修主任会等の会合の場で、取組の様子や実践事例については伝えることに努めてきた。
本年度の「研究の成果と課題」については、２月の「研究のまとめ」によって詳細に報告し、その普及を図るところである。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　☐１４年度からの継続校

【学校規模】　☐６学級以下　☐７～１２学級　☐１３～１８学級　☑１９～２４学級　☐２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　☐一部教科担任制　☐その他

【研究教科】　☑国語　☐社会　☑算数　☐理科　☐生活　☐音楽　☐図画工作　☐家庭　☐体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無